婆藪槃豆大士の著作と淨土教

加藤智學

一

佛滅後九百年、西曆第五世紀の頃、印度に出現して大教を光闡し、世に千部の論師と呼稱せられし婆藪槃豆(Vasubandhu 天親・世親)大士は、其の宣顯著作の業、眞に偉大なるものありき。陳の波羅末陀(Paramārtha 眞諦)三藏の譯出したる『婆藪豆法師傳』の終には、「阿僧伽(Asaṅga 無著)法師、殂歿す。後、天親、方に大乘の論を造り、諸大乘經を解釋す。『華嚴』・『涅槃』・『法華』・『般若』・『維摩』・『勝鬘』等の諸大乘經の論、悉く是れ法師の所造なり。又、『唯識論』を造る。『釋攝大乘』・『三寶性』・『甘露門』等の諸大乘論、凡て是れ法師の所造なり。文義精妙にして、見聞すること有る者、信求せざるは靡し」と稱叙せり。又眞諦譯『阿毘達磨俱舍論』の序には、「大小乘の論を造ること凡そ數十部なりき、並に盛に宣行して宗學せざるは靡し」と云へり。蓋し是れ眞諦三藏の傳說したるを記載したりしものならんか。かくて又唐の玄奘三藏の『西域記』五には、「大乘の論を製すること凡そ百餘部、並に盛に宣行す」と記傳せり。いづれにしても其の著作の頗る浩瀚なりしを想はしむるものにして、

七五

少くとも數十部の論頌の撰述せられたりしを察知せざるを得ず。而して今日、其等論頌の重要なる者は、支那譯の大藏經中に傳存し、又、西藏の大藏經の中にも、其の甚だ多く譯傳せられたるあり。されど亦、其等の傳譯せられたる諸論頌の中には、師の撰述として疑はしきものも無きに非ず。其の諸論頌中、特に重要なる者として後代に傳通したりしは、『阿毘達磨倶舍論』・『攝大乘論釋』・『十地經論』・『無量壽經論』・『中邊分別論』・『唯識二十論』・『唯識三十論頌』等なり。『阿毘達磨倶舍論』は、迦濕彌羅の毘婆沙師に贈られたる理長爲宗の「聰明論」にして、支那譯には二本あり、舊譯『阿毘達磨倶舍釋論』二十二卷・新釋『阿毘達磨倶舍論本頌』一卷・『阿毘達磨倶舍論』三十卷を傳存す。又西藏にも傳譯せられ、彼の藏中には『阿毘達磨倶舍論頌』・『阿毘達磨倶舍論頌疏』あり。『攝大乘論釋』は、兄の阿僧伽（Asaṅga）大士の『攝大乘論』を解釋したる論にて、支那譯三本あり、舊譯『攝大乘論釋』十五卷・『攝大乘論釋論』十卷・新譯『攝大乘論釋』十卷を存す。又西藏譯にも『攝大乘論疏』の傳存せるあり。『十地經論』は、『十地經』（『華嚴經』の「十地品」）を解釋したる論にて、支那譯には『十地經論』十二卷の傳存せるあり、西藏にも亦『十地經註釋』の譯傳せらるゝあり。『無量壽經論』は、『無量壽經』の義趣を宣顯したる論にて、支那に傳譯せられ『無量壽經優婆提舍』一卷を存す。願生の偈に論說を添へて往生淨土の要諦を概論せるが故に『往生論』とも『淨土論』とも稱せらる。『中邊分別論』は、彌勒（Maitreya）菩薩の說きたまひし偈頌を釋論す。支那譯には二本あり、舊譯『中邊分別論』二卷・新

譯『辯中邊論』三卷を存す。西藏にも亦『辯中邊論釋』の譯傳せらるゝあり。二十『唯識論』は、小乘外道を破斥して大乘の唯識の義趣を宣顯す。支那譯三本あり、舊譯『唯識論』一卷・『大乘唯識論』一卷・新譯『唯識二十論』一卷を傳存す。西藏譯にも『唯識論二十論頌』・『唯識論二十論疏』あり。かくて此の論には護法菩薩の釋論あり、支那に傳譯せられて『成唯識寶生論』五卷を存す。三十『唯識論』は、唯識の義理を顯彰せる最も重要なる論頌にして、支那に傳譯せられ『唯識三十論頌』一卷あり。後、此の論頌には、護法(Dharmapāla)・安慧(Sthiramati)・難陀(Nanda)等の十大論師の釋論ありて、玄奘三藏、此等を合糅し、護法菩薩の論說を主として、『成唯識論』十卷を成せり。此等は諸論頌中の特に重要なる者なるが、猶ほ此の外に多くの論釋の傳存せるあり。阿僧伽大士の造りたまひし偈頌を釋したる『六門敎授習定論』は、支那譯一卷を存し、西藏にも亦『六門陀羅尼釋』を譯傳す。『成業論』は、支那譯二本あり、『業成就論』一卷・『大乘成業論』一卷を存し、西藏譯にも亦『業成就分別論』あり。『五蘊論』は、支那に傳譯せられて『大乘五蘊論』一卷あり、西藏の藏中にも『五蘊論』あり。『大乘百法明門論』は、支那譯一卷を存し、また西藏にも譯傳せり。又支那に譯傳せられたる者に『佛性論』四卷・『止觀門論頌』一卷あり。諸種の大乘經の優婆提舍(Upadeśa 論議)も亦支那に譯出せられて傳存せり。その『法華論』は二譯本ありて、『妙法蓮華經論優波提舍』一卷・『妙法蓮華經優婆提舍』二卷を存す。『金剛般若論』は、阿僧伽大士の偈頌ありて、之を釋論せるものなるが、是また二譯本あ

り。『金剛般若波羅蜜經論』三卷・『能斷金剛般若波羅蜜多經論釋』三卷を存す。その他『文殊師利菩薩問菩提經論』二卷・『轉法輪經優婆提舍』一卷・『寶髻經四法優婆提舍』一卷・『三具足經優婆提舍』一卷・『大般涅槃經論』一卷の譯傳せられたるあり。斯くの如く婆藪槃豆大士の諸種の論釋は、支那及び西藏に傳譯せられたりき。支那譯藏經中には、猶ほ亦『勝思惟梵天所問經論』四卷・『涅槃經本有今無偈論』一卷・『如實論』一卷・『遺敎經論』一卷ありて、師の撰述として傳ふるなれども、此等は、經錄中に其の著者の名を註記せざりし點より考慮せんか、蓋し師の述作としては疑はしき者たるなり。又『百論』釋二卷・『發菩提心論』二卷の如き、師の撰述ならんと思考せられしこともありしが、その傳譯の時代などより推想して、今や是また大に疑はざるを得ざるものあり。かくて亦『三無性論』二卷・『顯識論』一卷・『轉識論』一卷を以て師の述作なるべしと思惟せられしこともありしが、此等も亦多少の疑はしき理由の存するものなり。其の他猶ほ師の著作ならんと推考せられし者あるなれども、其等は皆頗る疑はしきものなれば叙說せず。支那傳譯の佛典中にて、師の撰述として認むべき者は、如上叙說の諸論頌を出でず。かくて、西藏の大藏中には、上に列叙せし論釋の外に、猶ほ亦『攝大乘論偈集』・『攝大乘論偈集自釋』・『攝大乘論初地釋深義分別集釋』・『精釋實體論百頌』・『精釋實體論』・『三自性決定論』・『初因緣經分別論』・『畢無盡意菩薩示敎經廣釋』・『憶念法』・『佛憶念釋』・『一偈釋』・『四法經釋』・『普賢行願釋』・『七功德讚說』・『五欲德想說』・『戒律說』・『聚會說』等の諸論頌を攝持せる

ありて、此等はみな師の撰述として傳ふる所なり。されば師の著作は、その今日傳存せる者のみにても實に多數にして、其の大教宣顯の偉業、頗る浩大なるものにてありき。

さるほどに、師の『攝大乘論釋』(眞諦所出の舊譯本)の終には、「衆寶界は覺德の業の如し、我句義を說きて生ずる所の善、此の願に因りて悉く彌陀を見たてまつり、由て淨眼を得て正覺を成ぜん」と、其の志願のほどを陳宣せるあり。蓋し廻心して大乘に入り昔毀謗せし舌を以て今大教を宣顯する師の心には、かくて阿彌陀佛(Amitābha-buddha)に歸命したてまつり、廻向發願して見佛得道せんとの志念、深く切なるものあり、其の造論弘教の意趣また實に茲に存したりき。『攝大乘論』、下及び此の『釋論』十三・十四・十五には、阿僧伽大士と師とによりて、佛身・念佛・淨土、等の義の論顯せらるゝあり、佛の三身(自性身・受用身・變化身)を論じ、念佛の七相を說き、佛土の十八圓淨を叙するもの、是れ慥る淨土教の義趣の宣顯に關係深きものなり。師は亦『十地經論』三にも、佛の三身(應身・報身・法身)を說き、淨佛國土に就ては七淨を釋論せり。されば淨土教に關する師の論說は、此等の諸論の釋義の中にも種々顯彰せらるゝあり。而して其の一心に阿彌陀佛に歸命して安樂國に往生せんと志願する自らの信念を告白し其の念佛往生の要義を詳論したるものは『無量壽經優婆提舍』なりき。蓋し師の信念の歸趣する所、その實踐修行の極致は、正に斯の一論に闡彰せられたるなり。されば、その願生の偈の終には、「我、論を作り偈を說きて、願はくば、彌陀佛を見たてまつり、普

七九

く諸の衆生と共に、安樂國に往生せん」と志願したまひき。げに彼の『攝大乘釋論』の末尾の願頌と共に、以て師の造論の意趣志念のほどをば、斯くて恭しく世に宣示せられたるものなり。

二

『無量壽經優婆提舍』は、先づ「願生の偈」を誦出して『無量壽經』の所說を總持し、後に此の願偈の義趣を解說して詳かに五門の修道を論議せり。「願生の偈」には、「世尊、我、一心に、盡十方無礙光如來に歸命したてまり、安樂國に生せんと願ず」と、先づ其の自督を陳べて願意を告白す。かくて一心歸命の信念を宣し所歸の佛名を讃唱せり。げに是れ一論最要の華文なり。而して此の願偈は、『無量壽經』所說の眞實功德の淸淨莊嚴を觀察すべく頌句に總持して稱論せり。されば、「我、修多羅(Sūtra 經)の眞實功德の相に依りて、願偈を說きて總持して、佛の敎と相應せん」と告げて、次下には二十九種の莊嚴功德の眞實淸淨なるを讃說したりき。「彼の世界の相を觀ずるに、三界の道に勝過せり」と云へるより、「故に我は彼の阿彌陀佛國に生せんと願ず」と云へるまでは、佛土の莊嚴十七種の功德成就を嘆稱す。「無量大寶の王、微妙の淨華臺にいます」と云へるより、「佛の本願力を觀ずるに、遇ふて空しく過ぐる者なし。能く速に功德の大寶海を滿足せしむ」と云へるまでは、佛の莊嚴八種の功德成就を讃詠す。「安樂國は淸淨にして、常に無垢輪を轉ず」と云へるより、「何等の世界にか佛法の功德寶なからん、我願はくば、みな往生して、佛法を示すこと佛の如くならん」と云

へるまでは、菩薩の莊嚴四種の正修行功德成就を歌嘆す。かくて彼の安樂國土と阿彌陀佛と彼の佛國の諸の大菩薩との功德莊嚴二十九種を稱讚し已りて、最後に廻向願求して、「我、論を作り偈を說きて、願はくば、彌陀佛を見たてまつり、普く諸の衆生と共に、安樂國に往生せん」と結言したりき。されば此は是れ論主婆藪槃豆大士の自行化他の志念を宣言したまへる願生の偈頌なり。述作多しと雖も、其の自督を告げ其の實踐的信念を開陳すること斯くの如くなるものは、他に見る能はず。蓋し天親論主の歸命願生の志念は最も慇懃に此の偈頌の上に告白せられたるものなり。而して偈の後には、「無量壽修多羅の章句、我、偈頌を以て、總じて說き竟りぬ」と添言せるあれば、是れ『無量壽經』に據りて論讃せられたるものなること明かなり。古來、三經通申の論なりと稱す。されど此の『無量壽修多羅』といふは正しく大『無量壽經』のことなるべし。而して小『無量壽經』・『觀無量壽經』等の所說をも攝持せられたるものなしとせず。亦『華嚴經』・『悲華經』等の所說にも關聯せるもの無きに非ず。さるほどに、正しく大『無量壽經』に據れりとするも、此の經には異本の誦傳せられたるもの種々あることなれば、其の諸種の異本の中の何れに據られたるものなるやは明かならず。論偈の所說は是れ經の言詞に拘らずして巧妙自在に取意論讃せられたるものなり。かくて亦此の所讃の莊嚴功德の如きは彼の『攝大乘論』所說の十八圓淨にも幾分據れる所あるものなり。彼の論には、『百千經』(『華嚴經』等)に據り諸佛の淨土に就て十八種の圓淨(具足・圓滿)を說けりしが、今此の論

の願偈に「彼の世界の相を觀ずるに三界の道に勝過せり」と讃ずる清淨功德成就は、彼の論に「三界の行處を出過せり」と說ける處圓淨に同じく、此の論偈に「究竟して虛空の如く廣大にして邊際なし」と讃ずる無量功德成就は、彼の論に「大域の邊際は度量す可からず」と說ける量圓淨に一致し、此の論偈に「正道の大慈悲は出世の善根より生ず」と讃ずる性功德成就は、彼の論に「出世の善法の功能より生ずる所なり」と說ける因圓淨に相當す。かくて彼の(1)色相、(2)形貌、(3)量、(4)處、(5)因、(6)果、(7)主、(8)助、(9)眷屬、(10)持、(11)業、(12)利益、(13)無怖畏、(14)住處、(15)路、(16)乘、(17)門、(18)依止の十八圓淨と此の二十九種莊嚴の中の(1)淸淨、(2)無量、(3)性、(4)形相、(5)種々事、(6)妙色、(7)觸、(8)三種、(9)雨、(10)光明、(11)妙聲、(12)主、(13)眷屬、(14)受用、(15)無諸難、(16)大義門、(17)一切所求滿足の十七種の佛土莊嚴とは大に一致する所の者あり、必ずや彼の十八圓淨の論說にも據りて此の論の願偈は製作せられしものならんと、推想するを得べきなり。又此の願偈に大義門功德を讃じて、「大乘善根の界、等しくして譏嫌の名なし、女人と及び根缺と二乘の種とは生ぜず」と說かれたるが如きは、『大乘悲分陀利經』・『悲華經』(同經異譯)の所說とも關聯するものなり。『大乘悲分陀利經』三「離諍王授記品」・『悲華經』三「諸菩薩授記品」には、阿彌陀佛の因位、無諍念王(離諍王)の誓願を說けり。其の本願には、無有女人・等一化生・無不善名・人敬根具・菩薩無數・無有二乘等を誓へるあり。されば阿彌陀佛國には、女人あること無く、等しくみな化生して、不善譏嫌の名なく、諸根具足して根缺の

者あること無く、菩薩無數にして二乘あること無し。此の經說と今の論偈の所說とは、頗る一致するものなり。『無量壽經』には、法藏菩薩の誓願を說けるに、聲聞無數の願ありて、阿彌陀佛國には多くの聲聞あり菩薩ありと說かれたりき。然るに淨土の理想は『般若經』に於て純一大乘の佛刹を莊嚴せんと願求するに至り、龍樹(Nāgārjuna)大士には、亦この界外純一大乘の理想あり、されど猶ほ阿彌陀佛國には聲聞僧あり菩薩僧ありと思想せられたりき。さるほどに、今や『悲華經』には、阿彌陀佛國を純一大乘の淨土として宣顯し、聲聞無數の願は變轉して菩薩無數の願と爲り、二乘あること無しと說かるゝに至れり。かくて亦此の論偈の大義門功德には、「二乘の種は生せず」との言句ありて、純一大乘の淨土なることを說示したりき。以て淨土思想の進化變遷を推考すべきなり。されば『悲華經』と此の『無量壽經優婆提舍』との間に此等の聯關せる思潮の流るゝものあることを認めざるべからず。蓋し天親菩薩は今や此等の新しき思潮をも取り入れて此の論偈を誦出したまひしものなるべし。

三

此の『無量壽經優婆提舍』は、願偈を說ける後に、長行の論議を叙せり。「此の願偈は何の義をか明す」、「彼の安樂世界を觀じて、阿彌陀佛を見たてまつり、彼の國に生ぜんと願ずることを、示現するが故なり」と問答し、更に「云何が觀じ、云何が信念を生ずる」と諮問して、「若し善男子善女人、五

念門を修して行成就しぬれば、畢竟じて安樂國土に生じて、彼の阿彌陀佛を見たてまつることを得」と答說し、禮拜・讚歎・作願・觀察・廻向の五念門を宣顯せり。此の五念門は、身業・口業・意業・智業・方便智業の五門の修行なり。一に禮拜門とは、身業にて常に阿彌陀佛を恭敬禮拜し、彼の國に生ずる意を爲すなり。二に讚歎門とは、口業にて常に阿彌陀佛を讚歎し、彼の佛名を稱念し、彼の光明智相の如く、名議の如く、如實に修行し相應せんと欲するなり。三に作願門とは、意業にて常に作願し、一心に專ら彼の安樂國土に往生せんと志念して、如實に奢摩他(Śamatha 止)を修行せんと欲するなり。四に觀察門とは、智業にて常に觀察し正念に彼の佛國土と佛と諸の菩薩との莊嚴功德を觀じて、如實に毗婆舍那(Vipaśyanā 觀)を修行せんと欲するなり。五に廻向門とは、方便智業にて常に廻願し、一切の苦惱の衆生を捨てず、廻向を首と爲して、大悲心を成就することを得るなり。

かくて、此の第四の觀察門には、彼の佛國土の莊嚴を觀ずるに十七種あり。(1)淸淨、(2)量、(3)性、(4)形相、(5)種々事、(6)妙色、(7)觸、(8)三種(水・地・虛空)、(9)雨、(10)光明、(11)妙聲、(12)主、(13)眷屬、(14)受用、(15)無諸難、(16)大義門、(17)一切所求滿足の十七種の功德成就なり、彼の佛の莊嚴を觀ずるに八種あり、(1)座、(2)身業、(3)口業、(4)心業、(5)大衆、(6)上首、(7)主、(8)不虛作住持の八種の功德成就なり、彼の菩薩の莊嚴を觀ずるに四種あり、(1)不動遍應、(2)一念遍至、(3)無餘供佛、(4)住持三寶の四種の正修行功德成就なり。此の中、佛莊嚴の第八、不虛作住持功德成就は、偈に「佛の本願力

を觀ずるに、遇ふて空しく過ぐる者なし、能く速に功德の大寶海を滿足せしむ」と說かれたりき。げに是れ阿彌陀佛の本願力の廻向を稱說したるものなり。卽ち彼の願力を觀知し佛智を信樂して念佛すれば速に無上大利の功德を受得することを告げられたるものにして、是れ二十九種莊嚴中にて最も重要なる功德成就の宣顯なり。かくて此等三種(二十九種)の功德成就は、みな是れ願心にて莊嚴したまへる眞實淸淨の德相なり。さるほどに、如上廣說せる功德莊嚴は略して一法句に入る。一法句とは「淸淨」なり。「淸淨」句とは眞實智慧無爲法身なり。而して此の淸淨に二種あり、器世間淸淨(十七種の莊嚴佛土功德成就)と衆生世間淸淨(八種の莊嚴佛功德成就と四種の莊嚴菩薩功德成就)となり。一法句には此等二種の淸淨(二十九種莊嚴)の義を攝す。されば斯くの如く廣略を觀察して修行すべきなり。第五の廻向門は、禮拜・讚歎等を修行して、集むる所の功德善根を以て、自身の樂を求めず、一切衆生の苦を拔かんと欲し、衆生を攝取して共に同じく彼の安樂佛國に生ぜんと作願す。是を菩薩の巧方便廻向成就と名づく。菩薩は是くの如く善く廻向成就すれば、智慧門・慈悲門・方便門に依りて、三種の菩提門相違の法を遠離し、無染淸淨心・安淸淨心・樂淸淨心を以て、三種の菩提門隨順の法を滿足す。かくて此の三種の心は略して妙樂勝眞心を成じ、此等の信念によりて能く淸淨の佛國土に生ずるなり。

斯くの如く自利利他の五門を修行すれば、漸次に五種の功德を成就し、速に無上菩提に到達する

ことを得べし。此の五門は、近門・大會衆門・宅門・屋門・園林遊戯地門なり。初の四門は入の功德を成就し、第五門は出の功德を成就す。入の第一門は、阿彌陀佛を禮拜して彼の國に生せんとするが故に、安樂世界に往生することを得べし。是を近門と名づく。入の第二門は、阿彌陀佛を讃歎し、名義に隨順して如來の名を稱し、彼の光明智相の如く信受して修行するが故に、大會衆の數に入ることを得べし。是を大會衆門と名づく。入の第三門は、一心專念に彼の佛國に往生せんと作願して、奢摩他・寂靜三昧を修行するが故に、蓮華藏世界に入ることを得べし。是を宅門と名づく。入の第四門は、專念に彼の妙莊嚴を觀察して、毗婆舍那を修するが故に、彼處に到りて種々の法味樂を受用することを得べし。是を屋門と名づく。出の第五門は、本願力の廻向を以ての故に、彼處に至りて大慈悲心を起し、一切の苦惱の衆生を觀察して、應化身を示現し、生死の園・煩惱の林の中に廻入し、神通に遊戯して教化地に至る。是を園林遊戯地門と名づく。斯くの如く菩薩は四種の門に入りて自利の行を成じ、第五の門に出でゝ利他の行を成じ、五門入出の行を修して自利利他して速に佛果を成就することを得るなり。——是れ『無量壽經優婆提舍』の論說の概要なり。